

# まちづくりの場における シビックプライドの涵養に関する研究

田中 尚人<sup>1</sup>・日名子 葵<sup>2</sup>・高良 幸作<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp (Corresponding Author)

<sup>2</sup>正会員 株式会社オオバ 九州支店 (〒810-0074 福岡県福岡市中央区大手門 1 丁目 1-12)

E-mail: aoi980605@icloud.com

<sup>3</sup>学生員 博士前期課程 自然科学教育部地域デザイン専攻 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1)

E-mail: 201d2214@st.kumamoto-u.ac.jp

近年地方都市においては、就業機会不足や地域の魅力低下などが影響して、若者を中心とした人口流出が課題となっている。また、少子高齢化や地域コミュニティの衰退などから、地域そのものの衰退も懸念されている。このような地方都市において、地域の持続可能な存立を支えていくため、本研究では、シビックプライドに着目した。本研究の目的は、まちづくりの場において、高校生がシビックプライドを涵養していく要因、構造、過程を明らかにすることである。そのため、社会づくりの担い手を育むアクティブラーニングの考え方に基づき、まちづくりワークショップのプログラムを分析し、参加者の意識変化との関係性を明らかにした。研究の結果、シビックプライドとして、ふるさとに対する愛着と他者を意識した誇りを涵養するプロセスが明らかとなった。

**Key Words:** civic pride, community development, action research, active learning and local identity

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

近年、地域社会において地縁組織など、以前はあった強固なコミュニティが衰退し、人々のつながりが希薄化している現状がある。また、就業機会の不足や地域の魅力低下などが原因となり、若者を中心とした人口流出という課題に直面している。さらに、少子高齢化や核家族化、市町村合併などの影響による行政サービスの弱体化など社会状況の変化から、全国各地、特に地方都市や中山間地集落で、地域コミュニティの衰退が懸念されている。これらの課題の根底には「市民の地域に対する関心の低さ」という大きな課題がある。地域に対して無関心な地域住民が増えることで、まちづくり活動など協働の場が失われている。

このような状況において、持続可能な都市や地域づくりのために、地域住民自身が都市や地域の抱える課題解決に主体的に取り組んでいくことが求められる。一人一人が自らが住む都市・地域に対して、誇りや愛着を持つことが基本的な要件になる。その際、次世代のまちづくりの主体として、高校生は大切な参加者となる。

### (2) 研究の目的

本研究では、近年、地方創生や地域課題解決の文脈において注目されている「シビックプライド (Civic Pride)」に着目し、多様な主体が参加する、まちづくりの場に着目した。本研究の目的は、まちづくりの場において高校生がシビックプライドを涵養していく要因、構造、その過程を明らかにすることである。具体的には、熊本県玉名市にて実施された「玉名未来づくり研究所」事業を対象に、地方都市におけるまちづくりワークショップ (以下、WS と略) のプログラムを分析し、参加者の意識変化との関係性について考察した。

## 2. まちづくりにおけるシビックプライドの役割

本章では、まちづくりにおけるシビックプライドの役割を明らかにした。まず、本研究は WS 参加者を当事者とするアクションリサーチであることを示し、社会づくりの担い手を育むアクティブラーニング、シビックプライドの考え方を導入した。これら 2 つの概念の関係性を丁寧に分析することを本研究の主軸とした。

## (1) アクションリサーチ

矢守<sup>2)</sup>によると、アクションリサーチ (action research) とは、「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とは展開する共同的な社会実践」と定義される。

研究者と当事者の協働的实践により展開されるという点で、まちづくりの活動はアクションリサーチの側面を持つ。矢守<sup>3)</sup>や宮本<sup>4)</sup>の研究では、当事者がまちの問題解決ために研究者と協働するとき、独特の複雑性が存在すると指摘している。

本研究は、筆者らのチームがまちづくり WS に設計指導者、ファシリテーター、参加者として関与していることから、WS の参加者である高校生との協働的实践、つまりアクションリサーチであると考えている。

## (2) シビックプライド

伊藤<sup>5)</sup>はシビックプライドを「都市に対する市民としての誇り」と定義している。単に地域に対する愛着を示すだけではなく、「シビック (市民の/都市の)」には権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味があり、シビックプライドには「自分自身が関わって地域をよくしていこうとする、当事者意識に基づく自負心」<sup>6)</sup>という意味が内包されている。

これまでの研究から、シビックプライドの涵養段階としてまちや地域に対する「愛着」、他者を意識した際にまちや地域に対して持つ「誇り」、その上でまちや地域に対して何かしらの関与を伴う「自負」の3段階の涵養過程を仮説として設定した。

シビックプライドを構成する愛着意識については、地域愛着に関わる研究分野において、その形成要因に関わる様々な知見が蓄積されてきた<sup>7)</sup>。その中で、地域との関わり合いに関する経験や記憶が、地域愛着の醸成について重要な役割を果たすことが指摘されている<sup>8)</sup>。また、地域学習とシビックプライドに関する研究として田中<sup>9)</sup>の研究が挙げられる。この研究では、地域学習がシビックプライドの涵養と密接に結びついていると考察されているが、地域学習における「まち歩き」だけに着目したものであった。そこで本研究では、都市やまちづくり一般を対象としたまちづくりの場である、まちづくり WS に着目し、WS プログラムと参加者の意識変化との因果関係について考察した。

## (3) アクティブラーニング

地域に対する愛着形成を考えるに当たり、社会科教育の実践である地域学習を参照する必要がある。中央教育審議会の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議まとめ」<sup>10)</sup>には、「我が国は持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議のホスト国としても、先進的な役割を果たすことが求められる」と述べら

れており、「持続可能な開発のための教育」とは、環境などの様々な地球規模の問題を自らの問題として捉え、課題解決につながる価値観や行動を生み出していく「社会づくり」の担い手を育む教育をさす<sup>11)</sup>。

そのために「能動的で対話的な深い学び」というアクティブラーニングの視点からの教育が推進されている。学習指導要領 (平成 29 年 3 月 31 日公示) にも記述があり、ここでは「主体的な学び」を、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」と定義している。また、「対話的な学び」を「子供同士の協働、教職員や地域の人の対話、先哲の考え方を手がかりに考えることを通じ、自己の考えを広げ深めること」と定義し、「深い学び」については、「習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かうこと」と定義している<sup>12)</sup>。このようにアクティブラーニングの目的である「社会づくり」の担い手を育むという点において、シビックプライドと深く関わっていることが推察された。

## (4) 意識変化分析のフレームワーク

以上より、本研究では「能動的」「対話的」「深い学び」というアクティブラーニングの考え方を取り入れた学び方の実践と、まちや地域に対する「愛着」、他者を意識することで生まれる「誇り」、主体的に関わりを含む「自負」の過程を経て涵養されるとしたシビックプライドとの関係について考察した。

## 3. 玉名未来づくり研究所事業の概要

本章では、研究対象地の概要と研究対象とした玉名未来づくり研究所事業の活動詳細及び各回のプログラムをアクティブラーニングの考え方に照らして WS の特徴を明らかにした。

### (1) 玉名市の人口推移について<sup>14)</sup>

熊本県玉名市は、熊本市から北西20kmの場所に位置する。人口は令和2年12月末日のデータによると65,474人、総人口に占める65歳以上の割合 (高齢化率) は31.2%である。この数値は全国平均26.6%よりも4.6ポイント高く、高齢化が進んでいる。図-1に示した玉名市の人口推移をみると、1985年にピークを迎えたのち、減少傾向にある。対2015年増減率は、これまでの30年間で-10.1%、これか

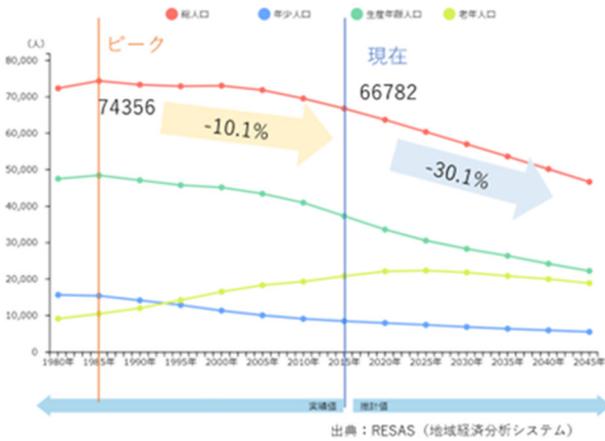


図-1 玉名市の人口推移



写真-1 発表@WS



写真-2 グループワーク@WS

らの30年間では-30.1%と想定されており、急激な人口減少が加速していくと予想される。玉名市の特徴としては、高等学校5校、大学が1校立地しているため、15歳～19歳の昼夜間人口統計は、昼間が1.12ポイント高く、学生の多い地域であるといえる。しかし、玉名市の年齢階級別純移動数の時系列分析によると、2000年以前は20歳前後の転出が転入を大きく上回り、25歳前後では転入が転出を大きく上回っていることから、高校卒業後、一度市外に転出する若者が多いことが推察される。

(2) 玉名未来づくり研究所事業の概要

2020年8月に「私たちが帰ってきたい玉名をつくる」をテーマとした「玉名未来づくり研究所」<sup>1)</sup>というプロジェクト型コミュニティが発足した。対象者は、高校生から39歳以下の玉名にゆかりのある若者とされ「たまな（地域や人）」と関わり、これからの玉名について自由に議論・行動し、若者目線の新しい価値観が生まれ、若者の意欲、知識、実行力を持つ人材を輩出することを目的とした。具体的な目標としては、地域課題の認知、地域社会との接点づくり、コミュニケーション力（自己肯定感）を高めるという3点が掲げられた。

表-1 全WS・各WS詳細

	日時	場所	講師	講演内容	班決め	WS内容	プログラム内容	能動性		対話性		深い学び	
								自分	玉名	自分	玉名	自分	玉名
第1回	8月22日	zoom	熊本大学工学部 田中尚人先生 石民家再生機構 村田さん ひまわりテレビ 種子島さん	村田さん：リノベーションについて 種子島さん：「地元」について	運営側	「この研究所でやってみたいこと」を発表しよう	説明（平野さん）	-	-	-	-	-	○
							講演（2人）	-	-	-	-	-	○
							WS	-	-	-	-	○	-
第2回	9月12日	玉名文化センター 大研修室及びzoom	九州財務局 渡辺隆司氏	五感で地域の宝を探そう—RESASを用いた地域活性化戦略—	運営側	地域の宝を探し出し、玉名のまちづくり戦略を立てよう	玉名の魅力を探そう（WS）	-	-	○	-	-	-
							データ分析（講話）	-	-	○	-	-	-
							まちづくりの戦略を発表	-	-	-	-	-	○
第3回	9月19日	玉名文化センター 大研修室	九州産業大学地域共創学部 講師 佐藤忠文氏 (zoom)	「想いをカタチに」 ～プロトタイプングしよう～	運営側	・イチゴ箱のリニューアル案を考えよう ・玉名駅のリノベーション案を考えよう	講演（佐藤先生）	○	○	-	-	-	-
							WS（プロトタイプング）	-	-	-	-	○	-
							発表会	-	-	○	○	-	-
第4回	10月10日	玉名市民会館	オープン・ガバナンス・ネットワーク代表理事 奥村裕一氏 熊本県立大学環境共生学部 松高隆隆教授 九州看護福祉大学リハビリテーション学科 中野聡太准教授	・松高教授：熊本の農業について ・中野教授：福祉・看護について ・奥村氏：デザイン思考が街を面白くする	参加者側	①玉名に住んでどうしたら成功できるのか ②そのために、何を玉名（地元）でやりたいのか を各々発表したのち、意見が似ている人と集まってグループワークを行う	講演（ゲスト講師3人）	○	○	-	-	-	-
							個人の考え発表	-	-	-	-	○	○
							WS（好きな人と組んで）	○	○	-	-	-	-
第5回	10月24日	玉名文化センター 大研修室	NECソリューションイノベーター 上田健治氏 熊本学園大学 塚章教授	私の成功に向けたブラッシュアップ	ファーマーズ：続行 そのほか：良いと思った人とグループになる	個人でやりたいことを考えて発表したのち、投票 投票数の多かったアイデア5つに分かれてグループワークを行う	WS（アイデアソン）	-	-	○	○	-	-
							発表会	-	-	○	○	-	-
第6回	11月8日	玉名文化センター 大研修室	熊本大学工学部 田中尚人先生	最終発表会	第五回の班を継続	発表会 皆で評価しあおう	講演（田中先生）	○	○	-	-	-	-
							最終発表会	-	-	○	○	-	-

### (3) 玉名未来づくり研究所のプログラム詳細

玉名未来づくり研究所事業にて行われた WS (写真-1, 2 参照) の各プログラムを, アクティブラーニングの視点から, 何に主眼が置かれたプログラムであったのか詳細に分析した。

表-1 に WS のプログラムの詳細と各プログラムが「能動的/対話的/深い」学びの何に主眼が置かれていたかを示した。その際, 対象を「自分/玉名」に分けた。能動性に関しては, 自分が変わろうとしているのか/玉名を変えようとしているのか, を「自分/玉名」の指標とした。対話性に関しては, 対話の中で自分が変わろうとしているのか/玉名を変えようとしているのか, を「自分/玉名」の指標とした。深い学びに関しては, 自分について知とうとしているのか/玉名について知ろうとしているのか, を「自分/玉名」の指標とした。

- a) **第 1 回の概要**: 第 1 回はスタートのプログラムであり, 主に説明や講演から新しい知見を得ることに主眼が置かれたプログラムであった。
- b) **第 2 回の概要**: 自ら玉名に対して提案する場面, WS として班の人と対話する場面, RESAS を用いた講演による, 玉名に対する深い学びのバランスが取れたプログラム内容であった。
- c) **第 3 回の概要**: ゲスト講師に九州産業大学地域共創学部の佐藤忠文氏を迎え, テーマの深掘りについて講演が行われた。自ら玉名に対して働きかけること (プロトタイプング) がメインとして行われたので, 「玉名に対する能動性」に重点が置かれたプログラムであったと分析できた。
- d) **第 4 回の概要**: ゲスト講師を 3 名を迎え, それぞれ, 玉名の農業について, 介護を通じた考え方について, デザイン思考についての講演が行われた。第 4 回は, 自ら玉名に対する行動を考える, 他者と対話する, 玉名に対しての働きかけを考える, 自らの考えについて, 玉名についての両方を深く学べるプログラムであったという点で, バランスが取れたプログラム内容であったと分析できた。
- e) **第 5 回の概要**: ゲスト講師の講演そのものが WS とともに進められた。そのため, プログラムとしては「深い学び」には該当せず, 能動性, 対話性に特化したプログラムであった。
- f) **第 6 回の概要**: 最終発表会では, 深い学びに該当する講演時間は設けられなかったが, 発表と評価の両方に重点が置かれたプログラムであったので, 能動性だけではなく対話性についても学べるプログラムであった。

### (4) まとめ

本章では, WS の各プログラムがアクティブラーニングの視点からどのような要素に主眼が置かれたかを分析

し, 各回の特徴を明らかにした。

第 1-4 回のプログラムでは, 対話的で深い学びに主眼が置かれたこと, 第 5, 6 回は, 深い学びの提供には該当せず, 能動的で対話的な学びに主眼が置かれたことがわかった。

## 4. ワークショップ参加者の受容に関する分析

本章では, 玉名未来づくり研究所のプログラムで提供されたプログラムを参加者がどのように受容したのかについて, WS 参加者の意識変化について明らかにした。

### (1) 玉名の魅力についての分析

玉名未来づくり研究所の全 6 回すべての会で, 振り返りアンケートを行っており, その中で必ず「玉名の魅力」について尋ねた。これは, この事業が「玉名の魅力づくり」と深く関わっているためである。

この「玉名の魅力」について参加者の回答結果を概観した。第 1 回, 2 回では「自然」「ラーメン」「温泉」「特産物」「農産物」といった「もの」を挙げる生徒がほとんどであった。しかし, 第 3 回では 2 人, 第 4 回以降ではその 2 人に加え 3 人の生徒が「もの」ではなく, 「研究所という場所があること」や「玉名のことを考えている人がいること」などの意見が挙がるようになり, その傾向は第 6 回まで続いた。第 3 回からの参加者には, 一貫して「人の温かさ」を挙げる生徒もおり, 特徴的な回答であった。

### (2) 振り返りワークショップの概要

#### a) 振り返り WS の概要

2020 年 12 月 10 日, 11 日の 2 日間にわたり, 玉名女子高校, 玉名高校, 専修大学玉名高校の 3 校にて, 1 時間程度の振り返り WS を行った。玉名女子高校では 2 年生 3 名, 玉名高校では 2 年生 2 名と 1 年生 1 名の 3 名, 専修大学玉名高校では 2 年生 2 名が参加した。

#### b) 振り返り WS の構成

振り返り WS は, 次のような構成とした。

##### i) 第 6 回の発表成果に対する評価のフィードバック

最終回で行ったグループ発表に対して, 参加者全員から集めた, 良かった点/おしかった点のコメントを一覧にし, フィードバックした。

##### ii) 振り返り曲線による WS の振り返り

第 1 回から 6 回の各回について, どのような感想を持ったかを, 「私たちが帰ってきたい玉名をつくる」という玉名未来づくり研究所事業の目的を踏まえて作成した「玉名に帰ってきたい度合い」を回答してもらい, 振り返り曲線を作成してもらい, 一人ずつ回答してもらった。

iii) 振り返りの感想の共有

最後に、WS全体を通じての意見交換などを行った。

(3) 各プログラムの受容に関する分析

本節ではWSプログラム（やったこと）と個々の意識変化（受け取ったこと）との関係性について分析した。ここではWSのプログラムが、実際に参加者にどのような影響を与えたかをヒアリング結果から分析した。

a) 第1回のプログラムの受け取られ方

第1回は、玉名未来づくり研究所の説明から始まり、ゲスト講師の講演、内容共有のディスカッションが行われた。「今から何をしようという興味があった」や「いろんな意見が聞けたので面白いと思った」という発言から、初めての場で、他者との交流を楽しみながら、次回への期待が高まる内容だったと分析された。

b) 第2回のプログラムの受け取られ方

第2回については評価が分かれた。自分の知らなかった玉名の一面を知る機会があったと評価する高校生がいる一方、「RESASを用いた講話が難しすぎてついていけなかった」という声があり、一部の高校生にとっては興味を維持することが難しいプログラムだった。

c) 第3回のプログラムの受け取られ方

第3回は、実際に玉名駅に行ったり、イチゴ箱のリニューアル案を実際に作ったりする「プロトタイピング」が好評だった。講話についても「『テーマの深掘り』という話を聞けたのがおもしろかった」と評価されており、講話、WSともに満足度が高かったと分析された。

d) 第4回のプログラムの受け取られ方

第4回は、講話が難しかったという声もあったが、グループワークで取り組む内容が具体的になってきたことや、自分たちのやりたいことができたようで、難しかったけれど楽しかったという評価であり、満足度の高い回であったと分析された。

e) 第5回のプログラムの受け取られ方

第5回は、講演そのものがWSとともに進められ、「班の人と意見を交換できて、自分に自信を持てるようになった」や「具体的に意見を言い合ったり、人の考えを聞けるのが楽しかった」という意見があり、能動性に加えて、対話性についても充実した内容であったと分析できた。

f) 第6回のプログラムについての受け取られ方

第6回、最終発表会は、第5回で提案した案を発表するだけでなく、互いに「良いところ/惜しいところ」を評価しあい、そのコメントを付箋に書いて届けるという時間があった。また、各班の発表に講師からの細かいフィードバックがなされた。そのため、第6回については「発表の雰囲気が良かった」などの肯定的な意見が多く見られた。

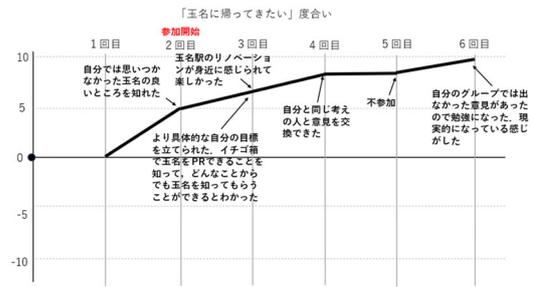


図-2 専修大学玉名高校 A氏（2年女子）

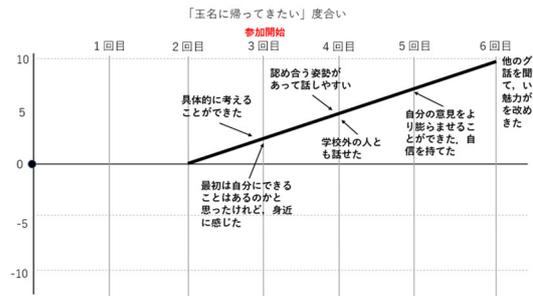


図-3 専修大学玉名高校 B氏（2年女子）

(4) まとめ

以上より、第1回のプログラムでは次回への期待が高まっていたこと、第2回のプログラムは評価が分かれ、玉名を知ることができてよかったという参加者と講話が難しく、興味を維持することが難しかった参加者がいたことが分かった。第3回はプロトタイピングなど、実際に行動するプログラムが楽しかったと高く評価されており、第4回は「講話が難しかった」とする参加者もいたが、全体として「難しかったけれど楽しかった」と評価されていた。第5回は意見を言い合うことやWSについて楽しかった等の受容がなされ、第6回は発表の雰囲気が良かったとの意見が多くあった。

5. 意識変化に関する考察

本章では3章と4章を照らし合わせ、参加者の意識変化とその要因を明らかにした。具体的には、振り返り曲線の分析などから、WSの各プログラムと参加者の受容の関係性について考察し、アクティブラーニングとシビックプライド涵養の関係性について考察した、

(1) 振り返り曲線の分析

本節では、振り返り曲線を用いたWS参加者の語りから読み取れる傾向を分析した。

a) 専修大学玉名高校

専修大学玉名高校の生徒の振り返り曲線を、以下の図-2、図-3に示した。専修大学玉名高校の生徒は「玉名の

こと前から好きだった」など当初から玉名に対しての関心が高かった。振り返り曲線の特徴としては、2人とも最終発表会まで右肩上がりのグラフであった。

A氏の「最初は玉名をPRすることは難しいと考えすぎでいたけれど、第3回目でイチゴ箱のデザインからでも玉名をPRできるということを知って、意外と自分もどんなことからも玉名をPRできるとわかった」という発言や、B氏の「自分にできることがあるのかずっと考えていたが、イチゴ箱のリニューアルなどで具体的にイメージがわき、身近に感じた」という発言から、玉名のために自分もできることがあると気づいたと分析できた。気づいた後に、自分の意見を他人と交換することや議論することを経て、最終発表会では、他の班からも学びを得ていると分析できる結果であった。

b) 玉名女子高校

玉名女子高校の生徒 3 名の振り返り曲線を図4、図5、図6に示した。共通して、講話が難しいと感じたときにモチベーションが下がっていた。C氏は第3回、D氏は第2回の講話が難しかったと発言していた。

発言内容としては「講話が難しく、自分が何をしたいのか、そのためにしないといけないことが具体的に実感がわかず、不安があった」などであった。しかし第4回以降は「話は難しかったが自分たちのやりたいことができたので、楽しかった」という発言や「4回目は前の3回よりも玉名について具体的に何をすべきかグループで考えることができたので興味、関心が高まった」という発言があった。具体的に自分たちのやりたい内容ができるということが重要であったと分析できた。

c) 玉名高校

玉名高校の 3 名の振り返り曲線を以下の図5、図6、図7に示した。玉名高校は全員が第3回からの参加であった。F氏の「第4回で意見が似ている人と集まった時に、実現不可能そうな案になってしまったことが残念だった」という発言やG氏の「第5回では、時間が足りなくて具体性に欠ける案になってしまったとても残念だった」という発言から、WSで自分の思うように成果を挙げられなかったときに曲線が下がる結果となっていた。以上より、玉名高校の生徒はWSの場において、思い描いたように自己実現ができたかどうかという点がモチベーションに大きく関わるといことが分かった。

また、G氏については第3回について「テーマの深掘りや視点の変化を感じて楽しかった」という発言があり、講話によっても彼らのモチベーションが上がったことが分かった。F氏の「5回目の班では実現できそうな案を考えられたので楽しかった」という発言やG氏の「自分の興味がある農業について班の人たちと集まって話せたのが良かった」H氏の「自分の興味がある分野について班で議論し、大人の人の意見が聞けたりして良かった」

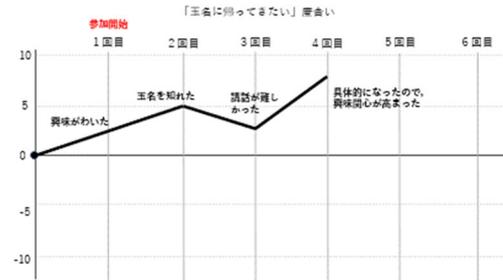


図4 玉名女子高校C氏 (2年女子)

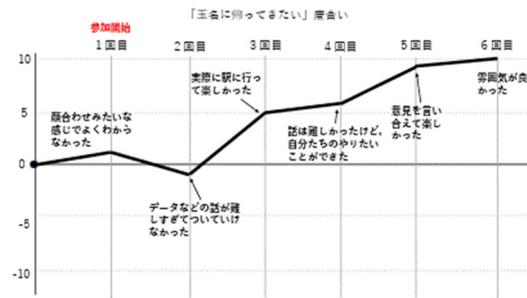


図5 玉名女子高校D氏 (2年女子)

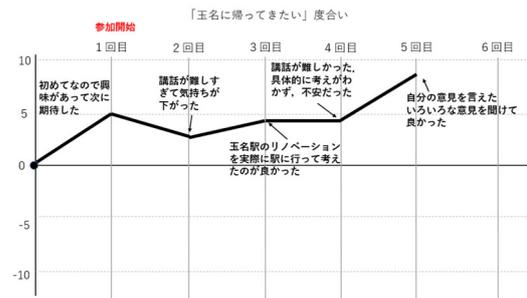


図6 玉名女子高校E氏 (2年女子)

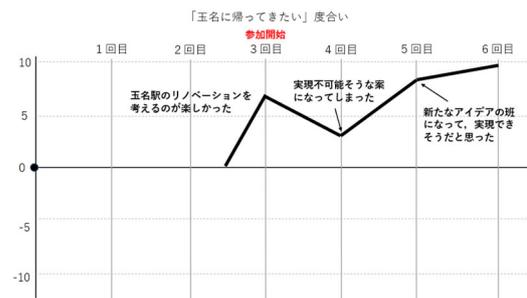


図7 玉名高校F氏 (1年女子)

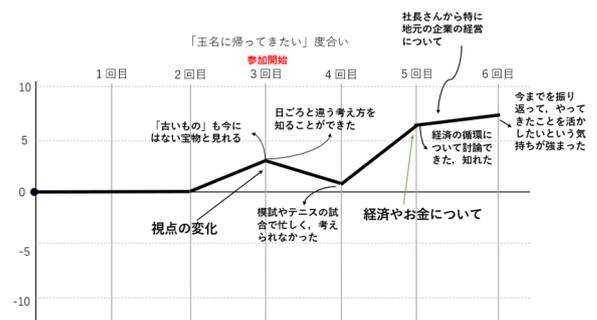


図8 玉名高校G氏 (2年男子)

と言う発言から自分の興味がある内容を WS でできた経験も重要であったと分析できた。

#### d) まとめ

振り返り曲線の分析から、専修大学玉名高校の生徒は「玉名のために自分もできることがある」と気付くこと、玉名女子高校の生徒は具体的に自分のやりたいことができるということ、玉名高校の生徒は WS の場において、思い描いたように自己実現ができたかということ、が重要であったと読み取れた。

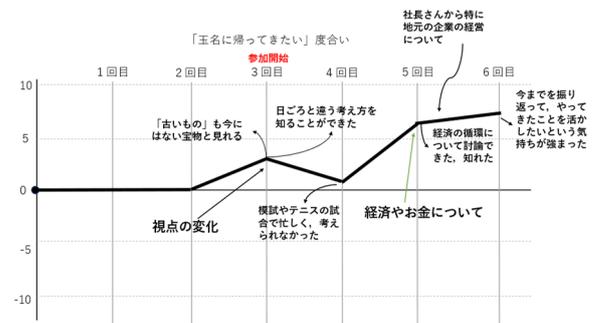


図-9 玉名高校 H 氏 (2年男子)

## (2) WSIにおける参加者の意識変化

本節では、WSプログラムと参加者の受容の関係性から、全6回のWSを通じた参加者の意識変化を分析した。

### a) 第1回, 第2回に見られた意識変化

第1回はスタートのプログラムであり、説明や講演から新しい知見を得ることに重点が置かれていたため、参加者は受動的な姿勢であった。次回への期待感は得られていたが、能動性の獲得といったような意識変化が見られることはなかった。第2回についても、アクティブラーニングの視点からバランスの取れたプログラムであったが、受動的な感想が多く挙げられていた。そのため、顕著な意識変化は見られなかった。

### b) 第3回に見られた意識変化

第3回で見られた意識変化として、自ら行動を起こし、それについて「楽しい」「面白い」といった反応が見られるようになった。その原因として、第3回のプログラムが「能動性」に重点が置かれたプログラムであったことから、参加者が「自ら行動する」という能動性を獲得したと考えることができた。

### c) 第4回に見られた意識変化

第2回と第4回についての参加者の受容の変化に着目した。双方ともにアクティブラーニングの視点からバランスの取れたプログラムであり、どちらも「講話が難しい」という声が寄せられていた。第4回は難易度が高かったにも関わらず、「楽しさ」も生まれていたことが分かった。その原因として、参加者が第3回で能動性を獲得していることが推察された。

また、意識変化の要因の二つ目として、第4回では講演の後、参加者が「玉名に住んでいて、どうしたら成功できるのか」「そのために何を玉名でやりたいのか」について発表する時間があつたことが考えられる。これは玉名、自分の双方に働きかけを考えるために有用なプログラムであったようで能動的な働きかけが促進され、その後のWSで対話をする際の主体的な姿勢や「楽しい」といった受容につながつたと推察された。

### d) 第5回に見られた意識変化

第5回における意識変化として、「対話が楽しい」という受け取られ方や自己肯定的な受容がなされていた。

その原因として、プログラム前半のグループワークでは対話的な学習にとどまっていたが、後半で個人の考えを「案」としてみんなの前で発表する時間があつたことが重要であったと考えられた。玉名に対して考えを膨らませるだけではなく、提案として自らが他者に話すという、対話的なプログラムであったので、このような受け止められたのだと分析できた。これは第4回とは逆の流れであるため、受容についてもこのような違いが見られたことが興味深かった。

### e) 第6回に見られた意識変化

第6回における意識変化として、他者からの評価の視点の獲得が見られた。第6回では「自分たちのアイデアに、他の参加者から新しいアイデア、コメントをもらえてよかった」という意見が見られた。これは、発表のプログラムに、一方的ではなく双方向的な働きかけの仕組み(相互評価)が組み込まれていたことが理由として考えられた。

## (3) シビックプライドの涵養プロセスの分析

### a) 個人についての分析

まず、参加者個人の意識変化について着目した。振り返り WS の最後に「アクティブラーニングとは能動的で、対話的な、深い学びと言われていますが、あなたはどれが1番大切だと思いましたか?」という質問をした。

専修大学玉名高校の A 氏は能動性を選び、「何かしたいと思っても、やらないことには始まらない。やることから始めないと何も変わらないので能動性が重要だと思う」と話した。B 氏は深い学びを選び、「物事をやり始めても、少して終わってしまうと意味がないと思う。深いところまで学ぶことができたなら、自分からやりたいという気持ちにもつながると思うし、考えも深まるのでそこが大事だと思う」と話した。

玉名女子高校の C 氏は対話性を選び、「自分が考えていることの他に、他人が考えていることを取り入れたほうがいろんな視点があつて深いことにもつながることができる。自分からすることにもつながられると思うので、対話性が重要だと思う」と話した。また、D 氏は深い学

びを選び、「学ぶことは、簡単だけれど難しい。わかった時は楽しい、もっと知りたいと思うが、わからないことがあると嫌になってしまうときもある。けれど、わからないことをわかるようになりたいと思うこともすごくあるので、私は日々学びたいと思う。だから深い学びが大事だと思う」と話した。

玉名高校の F 氏は「私は能動的に動けるほうではなく、人と話すことも自分の意見を言うことも苦手で、人から言われてやるのがほとんどだが、能動的に動ける人に憧れがある。能動的に動けると、もっといろいろなことができるようになるから、能動的が一番重要だと思う」と話した。G 氏は能動性を選び、「能動的であれば、意欲的になる。そして意見も深くなっていくと思う。今の時代、自分から進んで何かを見つけていく人が必要だと思うので、能動的が一番重要と思う」と話した。

参加者個人に着目すると、アクティブラーニングの視点では、「能動性」が重要だと回答する参加者が多かった。発言内容と照らし合わせると、ここでの能動性は「玉名」に対する働きかけではなく、「自ら」に対して能動的に働きかける意味で用いられていた。よって、参加者は玉名未来づくり研究所を通じて、自らに対して能動的な働きかけを行う重要性に気付いたと分析できた。

#### b) 参加者全体についての分析

玉名未来づくり研究所では、アクティブラーニングの視点から、第 1~4 回のプログラムでは対話性及び深い学びに主眼が置かれたプログラムが提供されたこと、第 5, 6 回では能動性及び対話性に主眼が置かれたプログラムが提供されたことが分かっている。また、WS を通じた参加者の意識変化として、第 3 回に能動性を獲得したこと、能動性を獲得した後に迎えた第 4 回のプログラムでは難易度が高くても楽しんで活動できたこと、第 5 回で対話的な学びを獲得したこと、第 6 回で他者への評価の視点を獲得したことが分かった。

以上より、アクティブラーニングの視点から対話的で深い学びに主眼が置かれた第 1~4 回のプログラムでは、

「玉名のいいところを知れてよかった」や「玉名の素晴らしいところを自分の私生活でも目を向けるようになった」というアンケート回答があったことから、玉名を知ることによってシビックプライドの涵養過程の始まりと位置付けた、玉名という地域に対する「愛着」の形成が見られたと分析できた。

一方、アクティブラーニングの視点から能動的で対話的な学びに主眼が置かれた第 5, 6 回では、「自分の考えた案がたくさんの人に認められ、うれしかった」「みんなを認め合う雰囲気があったから、自分から話したり意見を出せるようになった」と感想があった。このように第 5, 6 回プログラムでは、参加者同士の対話を通じて、参加者は他者への共感を示していたことが読み取れた。

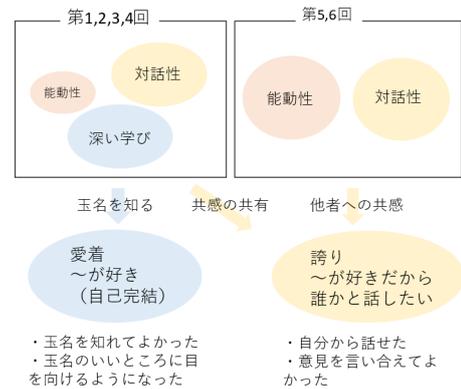


図-10 プログラムとシビックプライドの関係性

また、プログラム全体を通じて、玉名に住むほかの高校の生徒や玉名で働く大人と関わり合って意見を交換すること、学び合うことが重要であると、参加者には他者と共感が促されていたことが読み取れた。

以上より、「深い」学びを重視したプログラムから、参加者は、玉名に対しての愛着を形成し、プログラムから能動的に動く姿勢を手に入れた参加者は、主体的に他者と対話ができるようになり学びが促進されたと分析できた。これを図-10に図示した。

以上より、「玉名を深く知る」ことでシビックプライドの愛着「～が好き」という自己完結の主体的な感情が芽生え、それを他者と共感を共有をすることで、「～が好きで、誰かに自慢したい、他者への共感」というシビックプライドの誇りを獲得したと読み取れた。

## 6. おわりに

### (1) 研究のまとめと結論

本研究では、玉名未来づくり研究所のまちづくり WS において高校生がシビックプライドを涵養していく要因、構造、その過程を明らかにした。

WS のプログラムにより、玉名に対しての深い学びが提供され、参加者に地域に対しての愛着が形成されていた。同時に、プログラムから能動的に動く姿勢を手に入れた参加者は、主体的に他者と対話をするようになり、対話の楽しさや、自己肯定感が見られるようになった。

以上から、まちづくりの場において、まずシビックプライドで言う愛着つまり「～が好き」という自己完結の感情を得て、次に「他者への意識」すなわち「～が好きで、誰かに自慢したい」というシビックプライドの誇りを獲得したと理解された。

### (2) 今後の課題、展望

伊藤によると、シビックプライドの「自負」には「こ

の都市をより良い場所にするために自分自身が関わっている」という当事者意識に基づくとされている。つまり、都市のために何らかのアクションを取るというニュアンスが含まれる。今回の玉名未来づくり研究所を通じては、実際にまちや地域に対するアクションを起こした参加者は見られていないので、シビックプライドの「自負」の涵養までは至っていない。今後は、自ら能動的に動く重要性に気付いた参加者たちが、実際に玉名に対して「行動する」ことが期待される。

**謝辞：**本研究は、多くの方々にその成果を追うている。玉名未来づくり研究所を企画・運営して頂いた平野利和氏をはじめ玉名市役所の皆様、WSに参加し、ヒアリング調査にもご協力頂いた各高等学校の生徒、先生の皆様にもたいへんお世話になった。記して感謝の意を表す。

#### 参考文献：

- 1) 矢守克也：アクションリサーチ実践する人間科学,株式会社新曜社,2010.
- 2) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション共同当事者・時間・データ,株式会社新曜社,2018.
- 3) 矢守克也,李 勇昕:「Xがない, YがXです」—疎外論からみた地域活性化戦略—, 実験社会心理学研究, Vol.57, No.2, pp.117-128, 2018.
- 4) 宮本匠:アクションリサーチの主体性形成について:新潟県中越地震の復興過程から, 人間福祉研究, Vo.8, No.1, 2015.
- 5) 伊藤香織:シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素-富山市中心市街地と富山地域を事例として-, 日本都市計画学会都市計画論文集, Vol.54, No.3, 2019.
- 6) 伊藤香織, 紫牟田伸子:シビックプライド2【国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする, 株式会社宣伝会議, 2015.
- 7) 鈴木春菜, 藤井聡:地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol.25, No.2, pp.357-362, 2008.
- 8) 羽鳥剛史:地域コミュニティにおける離脱と発言に関する研究—A・O・ハーシュマンの離脱・発言理論の示唆—都市計画論文集, Vol.46, pp.991-996, 2012.
- 9) 田中尚人, 堀尾和美:小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究, 実践政策学, Vol.2, No.1, 2016.
- 10) 文部科学省中央教育審議会:次期学習指導要領に向けたこれまでの審議まとめ, 2016.
- 11) 前田康裕:まんがで知る教師の学び 2 アクティブラーニングとは何か, さくら社, 2017.
- 12) 文部科学省:新しい学習指導要領の考え方, 2017.
- 13) 井形康太郎・田中尚人:地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol.75, No.5 (土木計画学研究・論文集 36 巻), pp.181-189, 2019.
- 14) 熊本県玉名市:玉名市人口ビジョン, 2020.3.
- 15) 玉名未来づくり研究所ホームページ, 2021.2.1 閲覧.

(Received March 6, 2021)

## STUDY ON THE CULTIVATION OF CIVIC PRIDE IN COMMUNITY DEVELOPMENT

Naoto TANAKA, Aoi HINAGO and Kousaku TAKARA

In recent years, local cities have been facing the problem of population outflow to urban areas, especially among young people, due to a lack of job opportunities and a decline in the attractiveness of the region. In addition, there are concerns about the decline of the region itself due to the declining birthrate, local identity and aging population. In this study, it is focused on the "Civic Pride" in order to support the sustainable survival of the region in local cities in such a situation. The purpose of this study is to clarify the factors and processes by which high school students cultivate their civic pride in community development. For this purpose, it is analyzed the program of the community development workshop and clarified the relationship with the change in consciousness of the participants based on the concept of active learning that nurtures the leaders of social development. As a result of the research, it is clarified that the process of cultivating attachment to their hometown and pride in their awareness of others as a civic pride.